神様はきっと見ている

武上 渓

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
神様はきっと見ている

【Ｎコード】
Ｎ０６０２Ｆ

【作者名】
武上　渓

【あらすじ】
君はあの日…のサブキャラクター長沼ユウが、中国スパイから子犬を救出する？有り得ないレスキューストーリー！全８話怒涛の連載開始！

ー前書き

献辞

管理者のウメさんに

守り育てる人が居なければ
生きられない小さな命に
自分の全てをそそぐ
全てのお母さんに

そして
その全てのお母さんの気持ちを
土足で平気で踏みにじる事のできる
愚か者達に

涙を流すしかない
お母さん達に代わって

渾身の怒りを込めてこの作品を捧げる

ー神様はきっと見ている

ー前書き

まず、この物語を書く事になった経緯を書こうと思います。
メッセージ欄に届いた読者さんの文章が、最初のきっかけとなりました。
犬を繁殖するブリーダーと云う職業があります。繁殖させ、子犬を売る商売ですが、商売である以上売れ残りが発生します。この売れ残りをどうするかと云うと、引き取り手が無い場合…読者さんは処分と云う言葉を使われていましたが…事実は保健所に持って行き、容器の中で炭酸ガスにより窒息死にされると云う事です。
引き取り手の無い子犬は処分すると云う言葉に、読者さんは一匹を引き取られました。一匹が読者さんにとって精一杯でした。しかし、残りの犬達を思って、その無力さに落ち込まれてしまいました。
この読者さんに対して、武上渓が発したのは月刊武上の臨時増刊号になります。その後のやり取りの中で、武上渓が何が出来るかを考えました。アマチュアであっても作家である以上は、物語でと思いました。
では、どの部分からこの事実に対してアプローチしてゆくのか考えました。
ブリーダーが、ペット業者が、ペットブームが、ペットを買う人達が悪い…なら、こうすれば良いと云うようなアプローチには意味がないと云う結論に達しました。
武上渓が本作で採るアプローチは次の物です。ペット業者や保健所にいかなる正当性や法的根拠が在ろうとも、こうした事実に対して「違う。」と文章でも言葉でも発しなければならない。この問題に

有効な解決手段が無かったとしても、どんなに無力でも「違う。」と言い続けなければならない。
何故なら。
何の見返りも求めず。自分の全てを捧げて子供達を守り育てている、お母さん達の気持ちを踏みにじる事になるからです。
「犬じゃないか。」
と思った読者さんもみえるかもしれません。お母さん達にとっては同じ命です。守り育てる事を放棄すれば、死んでしまう小さな命に犬も人間もありません。全ての大人達は、お母さんが守り育てる事を放棄しなかったから、赤ん坊と幼児期を死なずに生きて行けたのです。今、育児を放棄したり、虐待によって殺してしまうニュースを目にしていると思います。それ程、お母さん達を限界にまで追い込んでしまう程に育児はギリギリの仕事なのです。
毎日ギリギリの所で命を守っているお母さん達に
「引き取り手が無いから処分します。」
と云う言葉がどれほどヒドい言葉かを、私達は思わなければなりません。武上渓は、ペット関係者も保健所の方にも、お母さん達に対してこう言う義務が有ると思います。
「救える命は、全て救います。」
そして、実際に救える命は全て救って頂きたい。もし、お母さん達が、あなたを育てる事を放棄していたなら、今あなたは死んでいた事を思って頂きたい。
そのお母さん達の気持ちを踏みにじる行為に対して、人の子として
「違う。」
と言わなければなりません。
こうした気持ちを、長沼（ながぬま）　優（ゆう）に託して
平井七丁目第４アパートより、岐阜県岐阜市下土居（しもつちい）に引っ越しを終えた長沼家の前から物語を始めます。

次話。
ー第1話生まれた街につづく

ー第1話生まれた街

少しケガしたくらいで
命まで奪う事はない
ー映画「シービスケット」トム　スミスの言葉

ましてや
ちょっと売れ残ったくらいで
ーそのシーンを見ていた武上渓の言葉

ー第1話生まれた街

その場所は。
天神川と云う用水路程度の小川が鳥羽川に流れ込む、静かな住宅地。その天神川の南には、中学生の頃には無かった岐阜環状線を挟んで、母校の上土居中学校が建っている。北には熊野神社に小学校。中学校の南には、親友の清美が消えた雨屋のあった交差点…清美は不思議な事件の後に戻って来て、小学校の近くに結婚して住んでいる。２才になる久志くんと云う男の子がいる。東京の平井七丁目第４アパートから、この生まれた街への引っ越しもやっと落ち着いて、外を眺める余裕ができた。

小鳥が飛びながら鳴き、隣の空き地には草がはえている。草のはえた空き地などというのは、東京ではめったにお目にかかれない。大抵は舗装されて駐車場になってしまう。
近所の家族もおおらかだ。子供の頃の、おじさんおばさんそのままの人柄で、何の違和感も感じない。
私の名前は長沼（ながぬま）　優（ゆう）。この街で産まれて、高校まで過ごした。東京の大学に進学し就職…東京で暮らしていた。同窓会で、毎日のようにケンカしていた話で、現在の夫はじめと盛り上がり…あれやこれやで、長女の直（なお）を妊娠して出来ちゃった結婚。結婚後、夫は大学の物理学教授になり、長男の歩（あゆむ）と次女の桜（さくら）が産まれた。
障害物が次々と現れるランニングマシーンの上で、夫と3人の子供と云う4本立てのサーカスの団長のような日々が私の日常だ。
それに引っ越しが加わった。夫は科学雑誌にSF小説を投稿しており、それが物理学の権威と呼ばれている日本トップの物理学者の目にとまった。岐阜大学に長沼研究所を用意するのでと招かれる事になったのだ。破格の研究費も出て、収入も5倍になると云う夢のような話だ。東京から都落ちではなく、故郷に凱旋錦を飾る事になった。
この天神川と鳥羽川に挟まれた土地は、夫の父親が持っていた土地で、建築費だけをローンに組んで、理想のマイホーム完成となった。
小4　小3　少2の子供達は、友達と別れるのが大変で、何を持って行くかが大変で、まぁ泣くわ喚くわ喜ぶわで…それでも今、4本立てのサーカスも本日公演終了に持ち込んだ所だ。

さて。
家の中に戻って、4本立てのサーカス団長に戻ろうとした時…一台のワンボックスカーが目の前を通り過ぎた。
向かい3軒隣りの家の前に車は止まり、市場の仲買人と云ったタイ

プの男性が降りてきた。
引っ越しの挨拶に一度会って、犬のブリーダーをやっていると聞かされた。名前は確か…鳥居さん。東京では、アパートの為に犬は飼えなかったけれども、ブリーダーをしている友人がいた。犬好きで、売れ残った子犬を引き取ってくれる人を捜して、走り回っている姿が印象的だった。その友人の印象で、ブリーダーさんには親しみを感じていた。しかし、この友人が全てのブリーダーを代表している訳では無い事を…私は知らなかった。そして私は、産まれて初めて、この世に悪意なき悪魔が存在する事を知らされる事になろうとは…。

鳥居さんは私に気付いたようなので、軽く頭を下げた。
鳥居さんもーどうも。ーと返して、自宅の中に入っていった。
すぐに犬のゲージを持って出てきて、車に積み始めた。
後から考えれば、よせば良かったのかもしれない。でも、東京の友人の印象が、私をそのワンボックスカーに引き寄せた。
車のラジオからニュースが流れている。ー唐嘩嶺(とうかりょう)中国国家主席が緊急来日し、富樫(とがし)総理と会談を行っていますが、来日の目的　会談の内容は明らかにされていません…ー
そのニュースを聞きながら見ると、ゲージの中には子犬が入っていた。名前はわからないけれど、耳の大きな犬だった。
「売れたんですか?。」
と聞いてしまった。
「いや。」
鳥居さんは笑いながら答えた。
「えっ?。じゃあ引き取ってくれる人の所に?。」
「いやいや。保健所にね。」
「保健所って何ですか?。」
「処分ですよ。そんな面倒くさい事してられませんよ。」
「はぁ〜?。」
頭の中で思考の回路がつながら無かった。しかし、かつての友人の

言葉が頭をつらぬき、回路がドカンと繋がった。
ー絶対に引き取り手を見つける。保健所で窒息死なんかさせないー
そして私は爆発した。
「何言ってるんです！。駄目ですよ窒息死なんて！。」
「かわいそうだけど、私もさほど経営に余裕が有るわけじゃないし、ヒマでもないんですよ。」
まったく悪気のない顔で言われてしまった。
「そんなこ…関係ないですよ。よく考えて下さい。生きてるんですよ？。」
鳥居さん…いや、犬殺しの鳥居は、とぼけた顔のままで、私は怒るよりも、こわくて震え上がってしまった。
「じゃあ。奥さん引き取って下さいよ。5匹いますから。」
ー5匹？絶対無理。でも…ー
「あの。すぐ知り合いに問い合わせます。引き取り先を捜しますから。待って下さい。」
「いや。そんなヒマじゃないんだけどね。」
「2時間待って下さい。なんとかしますから。」
「2時間…。まぁいいけど。」
「待てますよね？。大丈夫ですよね？。」
「いいでしょう。そんなに言われたら…ご近所だしね。」
犬殺し鳥居…いや鳥居さんはゲージを車から降ろしてくれた。私は遅い足をとばして家の中に駆け込み、襲いかかってきた4本立てのサーカスを振り切りテーブルの上の携帯をつかんだ。

親友で同級生の清美に電話した。清美のネットワークで引き取り手を捜して貰った。
1時間で返事が来た。
ーとりあえず、ユウが5匹とも引き取って。全部引き取り手が決まったから。ー
「ありがとう清美。地元に清美が居て良かった！。」

ー急いで。そのブリーダーさんの気が変わらない内に。ー
清美は私の話から、鳥居さんの性格を察していたのかもしれない。
そして、その心配は的中した。

また走って、鳥居さんの家の前に戻った。
ワンボックスカーは家の前にも車庫にもない。門を入って、庭の柵に親犬しかいない。血の気が引いた。玄関のドアを叩いて、鳥居さんと呼んだけれども…返事がない。
「ウソ。ウソでしょ。待つって言ったじゃない。」

そう言い終わった所で、車の音がして振り返った。鳥居さんのワンボックスカーだ。本人が降りてきた。
「鳥居さん。5匹全部引き取り手を見つけました。とりあえず私が引き取ります。」
鳥居さんは、少し黙ってから言った。
「…本当に見つかったんですか?。私がやっても、なかなか見つからないのに。」
「本当です。友達が掛け合ってくれたんです。渡して下さい。」
また黙った。そして信じられない言葉が出てきた。
「あ〜。もうさ〜無理だと思って。」
「無理だと思って?なんです。」
「保健所に置いてきたよ。まさか、見つかるとは思わなくて。」
「2時間待つって言われましたよ!鳥居さん!。」
「…だから無理だと思ったんですよ。」
「だって2時間…。」
その後は涙が鼻の穴に溢れて、フガフガと云う擬音になってしまった。
この男を相手にしていては命は救えない。私は切り替えた。
ポケットから桜の鼻をかむティッシュを取り出し鼻をかむと、携帯

で保健所の番号を出して掛けた。犬殺しの鳥居は、サッサと家の中に逃げて行くのが見えた。

ーはい。岐阜保健所です。ー

「あの。今日。処分で５匹犬が持ち込まれたと思うんですけど。鳥居と云う男性が持ち込んでますよね？。」

ーお待ち下さい。担当と代わります。ー

身を刻むような時間が流れた。

ーはい。お電話代わりました。ー

「あの、処分に今日持ち込まれてますよね。子犬が５匹…。」

ーえぇ。持ち込まれてます。ー

「まだ処分されてないんですよね？。」

ー明日ですね。処分は。ー

「あのその５匹、引き取り手が決まったんです。今すぐ引き取らせて下さい。」

ーそうですか。わかりました。閉めずに待ってますので、お越し下さい。ー

「ありがとうございます。すぐ行きます。」

私はこれで良かったと、自分の車で保健所に走った。

でも…それは全て良かった事にはならなかった。

私は保健所の担当職員さんに案内されて、犬が収容されている部屋に連れていかれた。両側２段に２０個くらい檻（おり）があり、その中で沢山の犬が吠えていた。私はその場で動けなくなった。

「…これ。全部。明日？。」

「残念です。見て下さい。ただ岐阜保健所では犬の譲渡会がありません。明日午前中にやります。前回は全て引き取られました。今回も同じ結果を期待してます。しかし、残れば処分されます。」

いったん外に出て、別の部屋で２個のゲージを職員さんは出してき

た。中にあの5匹の子犬が入っていた。
「このゲージは、引き取りが終わったら返却して下さい。ちょっとゲージ無しでは運べませんよね。」
職員さんは、茫然としている私の両手にゲージを持たせてくれた。
「処分の目的を説明させて頂いてよろしいでしょうか?。」
「…はい。」
「第一に、捨て犬による野犬の増加を防ぐのが目的です。野犬に狂犬病等の予防接種を行うのは困難です。同時に人間を咬む事故を防がなければなりません。もし、あの数の犬が街に捨てられる事を考えれば、処分はやむを得ません。」
「全部。ペット業者の?。」
「いえ。一般の家庭で飼えなくなった犬もいます。捨て犬も少なくありません。」
「でも…。」
「あなたのお気持ちは分かります。私は救える命は救います。だから、あなたを待ちました。この全ての犬を保健所が救うとしたら、予算がそれで無くなります。あなたのような方や、ボランティアの方々に頼るしか有りません。それが現実です。」
「…はい。」
私は、そう答えるしか無かった。
2つのゲージを持って、身を切られる思いで保健所を出た。ー私がした事は意味があったのだろうか…。私は鳥居さんを非難出来るのだろうか。ー
と思いながら。

家に着くと、長女の直(なお)が飛び出して来た。
車から降りる私の顔に、涙を見つけたのだろう…びっくりした顔で私を見つめた。
「ごめんね直。ちょっと突然だったから。」

「うん。子犬は?。清美ねえちゃんと知り合いの人が来てるよ。」
「後ろのゲージに入ってるよ。」
直は嬉しそうな顔で、後部座席を覗き込んだ。
「持ってってくれる?。」
「うん。」
直はドアを開けると、急いでゲージを取り出して、家の中に運んで行った。

私は…。
良かったと笑う気持ちになれなかった。そして。おそらく喜んでいる清美や引き取りを引き受けてくれた人達に、保健所の檻に残っていた犬達の事を話す勇気は無かった。
車を降りた所から動けない私を心配して、清美が外に出て来た。

「ユウ。何かあったね?。」
清美には隠せなかった。すべてを話した。
「気の済むまで泣きなさい。子供達は今夜ウチで預かるから。」
そうしたいと思った。でも…思い直した。
「うぅん。家の3っの命は私の責任だから。私が弱虫だったら責任を果たせない。だから。泣くのはやめる。」
清美はあきれた顔をして見せた。
「意地っ張りだなユウは。子供の頃から変わんないね。ハジメの事ずっと好きだったくせに、嫌いだって意地張ってさ…そうでなきゃ、もっと早く結婚できたのに。」
「人生はさ。近道できないの。迷って遠回りしないと、価値に気づけないの。だから、いっぱい泣いて遠回りするの。」
「いいけど〜でも、引き取ってくれる奥さん達には、ちゃんと挨拶してもらえるかな?。」
「もう大丈夫。行くよ!。」

私は涙を拭いて、家の中に向かった。

次話！
ー深夜の帰宅
に続く

ー第2話深夜の帰宅

ー第２話　深夜の帰宅

なんとか奥さん達には笑顔をつくって、お礼を言う事ができた。子供達に食事をさせ、直に弟と妹を風呂に入れさせてと…やっている内に夫の帰りが遅いのに気付いた。昼過ぎから大学に出勤だった。もっとも、研究室では日によって時間を忘れてしまう人ではあったけれど…それなら電話が有るはずだった。携帯に着信もメールもない。代わりに清美からメールが入っていた。

：Ｍｅｓｓａｇｅ
まだ凹んでるかな？。ユウはさ、手が２本で体がひとつじゃない？。千手観音はさ、全ての人を救おうとして千本の手を持ったんだって！スゴスギ。でも救いきれないんだって…。そんなスゴイ観音様が全部救えないのにさ、ユウが全部救おうとして悩んじゃダメ！。そのズングリムックリの二本の手で５匹の命を救ったじゃない！。その事を否定しちゃうなんておかしいよ。あの保健所の他にも、同じ運命の犬達が世界中に居るはずでしょ？。ユウは世界中の犬を１人で救うつもり？。…無理だよね。５匹でユウの責任は果たせたよ。後は同じ気持ちを持った人達に任せましょ。いつか世界中の全ての犬達が処分されない日を信じようよ。元気だせ！。ナガヌマ　ユウ！。
竹山　清美

ーＥＮＤー

「そうだよね…ありがと。」
返信を打って、子供達を寝かせると１１時になった。
さらに。１２時を２０分過ぎた所で、玄関のチャイムが鳴った。夫は鍵を持っているのでチャイムは鳴らさない。時間が時間だけに、警戒しなければ。インターホンはない。ドアを閉めたまま、私は聞いた。
「どちら様でしょうか?。」
「警視庁生活安全課２部の横山と申します。ご主人をお送りしました。長沼はじめさんのお宅ですよね?。」
「はい。はじめは夫ですが…。夫が何か?。」
「かなり酔っておられまして。車で帰るとおっしゃられるので、私が運転してきました。」
夫は酒を飲めなくはないが、自分から飲みに行って酔っ払う事はない。
「夫とは、どういうご関係でしょうか?。」
「ご主人とは、たまたまバーで隣りに座っただけなんですが、竹山透さんと清美さんを私が知ってまして。雨屋事件とメモリアルの事件で。」
ハタと思い当たった。
「２部の白根さんの所の横山さん?。」
「良かった。そうです。」
「学生会館で延長コードを見つけた人物と、それを持ってきた人物を答えて下さい。」
「…いいですよ。見つけたのは竹山透さん。持ってきたのは清美さんです。」
私はメモリアルセンター事件（君はあの日のまま帰ってきた小谷編

参照）の話を清美から何度も聞かされていた。清美は透くんから。
透くんは小谷利治刑事からの聞き伝えではあったけれど…。
私は玄関のドアを開けた。

２０代後半の背広を着たイケメンの青年に、ほぼくたびれた４０代の大学教授が肩を担がれていた。
「すいません。横山さん。疑ってしまって…。」
「いや。それ位慎重じゃないと、今は危険です。今の対応は１００点満点です。…ちょっとご主人、ご自身では立てないようなので、寝室まで運びます。」
華奢に見えるものの、１８０ｃｍでメタボリック検診ギリギリの夫を、軽々と支えて横山さんはドンドン入ってきてしまった。何故か間取りを知っているかのように、寝室に音も立てずに真っすぐ運んで出て行こうとした。
「あっあの横山さん。ありがとうございました。わざわざ送って頂いて。」
「問題ありません。これ名刺です。２部にご用があれば、私の携帯でも２部の代表電話でもお掛け下さい。」
この時は疑問に思わなかったけれど、ここで名刺を出してご用が有ればと云うのは奇妙だった。２部は一般市民のご用を承る機関なんかじゃない。夫も私も、すでにこの時事件に巻き込まれていたのでした。

翌日。
子供達を送り出しても、夫は起きて来ない。８時半くらいに、這いつくばるようにリビングに現れ、大学に自ら電話して、休む事を告げた。

私は昨日の事を夫に話したかった。出来れば慰めて欲しいと期待した。ところが…。

「聞いてくれ。ユウ。」

と…お母さんではなく、ユウと切り出されてしまった。

「俺は無力だ。」

と言われて、慰められるどころか、慰めなければならない事を覚悟した。今日の家事の予定はメチャメチャになりそうな事も…。

前日。長沼はじめ物理学教授は、自分の研究室で論文を書いていた。研究室は遺伝子工学研究棟の中に臨時に部屋をあてがわれていた。物理学研究棟はまだ建設中で、2ヶ月先が完成予定だった。どうゆう構造なのか、臨時の研究室は独立した入口を持っていて、遺伝子工学研究棟とはドアが無かった。長沼教授が研究室に出入りしても、遺伝子工学の方ではまったく分からなかった。しかし、音や会話は壁を通して丸聞こえだった。長沼教授はしゃべる必要もないし、音が出るような実験もとりあえず無かった。その為、遺伝子工学研究棟では長沼教授の存在にまったく気付いていなかった。そして夕方5時を過ぎて、長沼教授は本業を終え帰ろうとした。しかし、SF小説のアイデアを思いつき夢中でメモを取り始めた。6時前後に、遺伝子工学教授の陳(ちん)教授と孫(そん)助手の会話が、壁越しに聞こえてきた。名前からも判る通り2人とも在日中国人の2世で、会話は北京語ではなく広東語だった。彼らは普段は日本語しか使わない。

長沼教授は広東語を理解できた。学生の頃に気まぐれから広東語を話す留学生と親しくなり、完全に習熟していた。さらに、SF小説のネタにするために遺伝子工学の論文も読んでいた。陳教授はDNAに情報を書き込むナノマークと云う分野が専門で、その論文も読んでいた。そうした人物が聞いているとも知らずに、2人はとんでもない事を大声で話し始めた。

（以下は広東語の会話）

ー明日。アメリカ班から設計図が届く。
ーボリュームは？
ーハード部分の他に、火器管制　操縦系　レーダー系　通信系のソフトウェアだな。ラプターの次の主力戦闘機らしい。まだコードネームもない。
ーじゃあ、そのまま使われないかもしれませんね。
ーバージョンは当然アップしてゆくだろな。…とにかく、明日の９時から始めて…４時には全て読み取る。
ー子犬のＤＮＡに１と０で書き込んであるんでしょ？４時に終わりますか？。
ー日本の公安関係が動き出したらしい。４時に終わらせて…子犬を処分して…東京の中国大使館に逃げ込む。出来なければ、カプセルを噛んで自決する。
ー子犬自体を本国に送れないんですか？。
ーそのルートは２部に潰された。他にＤＮＡを読み取れる施設が使えるのはここだけだ。
ー処分って、射殺するだけじゃ駄目でしょ。
ー焼くしかない。車に乗せて、車ごと焼く。
ー派手過ぎませんか？。
ー焼夷火薬を使う。３分で完全燃焼させられる。消防車が来る前に証拠は消えるはずだ。

長沼教授は手が震えるのを必死で押さえていた。
気付かれたら殺される。
壁の向こうの２人が去るまで１時間。身動きもせず長沼教授は待った。
おぼつかない足取りで研究室を出て、車に乗った。安心感と共に、明日の子犬の運命が頭に渦巻き始めた。
見て見ぬ振りもできる。
だが…。

長沼教授は、車を歓迎会やら打ち合わせに使っていたメンバーズクラブに向けた。
アルコールが必要だと、長沼教授は判断を下した。
そして、その後ろを横山刑事が単独で尾行していた。メンバーズクラブで隣りに座ったのは、けっして偶然ではなかった。横山は広東語が解る長沼教授から、その夜…全てを聞き出す事に成功した。

夫から事情を聞いた私は。
「忘れましょう。」
と普通は言う所だった。でも、私はすでに人間の都合で命が失われる現場を見てしまっていた。私の口から別の言葉が出た。
「絶対に違う。」
「それは何に対してだ?。ユウ。」
「人殺しの戦闘機の為に、子犬が焼かれるなんて絶対に違う!。」
「そうだ。その通りさ。」
「救い出す。4時に焼かれる前に。」
「誰が?。仮面ライダーか?なんとか戦隊か?。ゼブラーマンか?。」
夫はまだアルコールが残っている。
「長沼ハジメと長沼ユウの長沼レスキュー隊がやるの!。」
「ユウ…お前も酔っ払ったか?。俺の酒臭い息で。」
「私はシラフよ。」
夫の目が冷たく光った。
「2人共、殺されるかもしれないぞ?。」
「直が居るわよ。」
壁の小学生全日本合気道大会優勝のメダルと賞状を私は見た。
「待て。小学4年生を巻き込むな。」
「小谷のお母さんが認めた達人よ。グリーンベレーでも敵じゃないって。」

「そりゃ物の例えだ。ルールに則ってグリーンベレーと戦えば勝てるかもしれん。ルール無用の中国人では訳が違う。」
「お父さんが行かないなら、私だけでも行く。」
「待て。行かないわけないだろ？。ユウを見捨てられると思うか？。幼稚園の頃から愛してるのに。」
「まさか。冗談はやめて。」
「ファーストキスは入園式の後だったのを覚えてないのか？。」
「ウソ言わないで。しつこいから叩いたのは覚えてるけど。」
「思い出せ。歯と歯が当たったから、ユウが怒ったんじゃないか。」
私は何となく、そんな事だった気がしてきた…。
あ～でもそんな事思い出してる場合じゃないよ！！。
救える命は全て救う！。泣いてる場合じゃないぞ、長沼ユウ！。

次話。
ー作戦計画
に期待せよ！！

ー第3話作戦計画

ー第3話作戦計画

まず、歩と桜を清美に頼まなければならない。2人共清美ねえちゃんが大好きなので問題ない。特に桜は、清美の子供である久志くんを弟と思っていて、嫌がる事はない。
問題は私達の作戦を、清美が承認してくれるかどうかだった。夫と竹山家に出向いた。

「2人とも子供じゃないんだから。そんな事に関わっちゃ駄目よ。」
「清美。見捨てるの?。子犬達を?。」
清美はしょうがないなと云う顔になった。
「わかった。横山さんに電話して、2部に任せましょ。…だいたい直ちゃんにボディーガードさせるなんて、どうかしてるよ。」
「2部は駄目。」
「あっさり否定するのね…根拠は?。」
「子犬にはアメリカの軍事機密が書き込まれてるのよ。2部だって子犬を処分するしかないわよ。」「じゃあユウ?。あなた中国スパイと2部を相手に、どうやって子犬を救うつもり?。」
「2部は敵に回さないわよ。」
「ユウさん?。話しのつじつまが合いませんけど?。」
「救うのは私達がする。2部は駄目だけど…白根さんなら。きっとわかってくれる。」
「会った事もないのに、なんでそんな風に思っちゃうわけ?。」
「メモリアルセンターの事件の話しを聞いた時に、白根さんは命を

粗末にする人じゃないって感じた。ちゃんと説明すれば…2部は駄目でも、白根さんは殺さない。殺さずになんとかしてくれる。そう思うの。」
「少女漫画じゃないの。ユウの都合でハッピーエンドにしてくれるのは、小説家になろうの武上先生だけ。…そりゃまぁ白根さんがそうしてくれる可能性は、ないとは言えないけど…。」
清美は反対することに少々弱気になったようだ。ここを一気に攻めなければ…。
「でしょ?。白根さんが殺さないと言うまで、子犬を渡さなければ良いのよ。私、自信ある。」
清美は夫に矛先を変えた。
「ハジメはどうなの?。」
「俺か?。俺はトコトンユウをサポートする。それだけだ。もし見捨てるなら、ユウの気持ちを見殺しにする事になる。これは救える命だ。…ツキも必要だけど、ユウの作戦には成功する根拠がある。俺はノルよ。」
「ロマン有りすぎよ。多分透くんも反対する可能性は低そうね…。」
私はたたみかけた。
「じゃあ清美も長沼レスキューに入隊ね!。歩と桜をお願いします。」
「いいけど…。やっぱり心配だよ。あっさり行けば良いけど。」
「物理学者と格闘家が揃ってるんだから、心配無いって。」
「それが一番心配なんだけど…。」

そう言う清美の家を出て、直と歩と桜を小学校から引き取って、再び竹山家に向かった。
車内は質問責めになったが、清美ねえちゃんの所に行くの一言で静かになった。親の私にも、何故静かになるかは謎だけれども、利用出来る物は利用させてもらうしかない。

しかし、直を救出に参加させるには説得が必要だった。

「待ってよ。どこの世界に、親を中国スパイから守る娘がいるのよ！。逆でしょ？。」

「いいわよ。やってくれないなら。無理にとは言わない。」

直はこう言われたら、引けないはずだ。

「じゃあどうするのよ？。かなうわけないんだから…。私がやるしかないんだから…。」

「じゃあお願いね！。」

「いいけどさ～こんな事広まったら、お嫁に行けなくなっちゃうよ。清美ねえちゃんみたいなお嫁さんになりたいのに。」

「何言ってるの。これからは、強い女の子に男の子がついて行く時代よ。」

「私はチクザンのおじちゃんみたいな男の人が良いの。」

「透くん？。もうああいう人は居なくなるね。残念だけど。」

夫が口を挟んだ。

「なんで、直は透と清美が良いんだ？。」

「だって、愛し合うって事がどういう事か、初めて教えてくれたんだもん。」

「お父さんとお母さんも愛し合ってるんだけど？。」

「家はさ～ほのぼのし過ぎてて。熱くないじゃん。熱くなる必要がないんだろうけど…やっぱり～熱い方がさ、いい感じだと思う。」

夫はあきれて笑い出してしまった。私はチョット嫉妬した。

「疲れるわよ。熱いのは。」

「私の好みですから。」

私ソックリの口調で言う直に降参した。きっと夫のような男性を連れてきて、ほのぼの暮らすに違いない。

「直。」

「…何？。」

改まった私に、直は緊張してみせた。

「頼むわよ。子犬とお父さんとお母さんの命がかかってるの。」
「うん。まかせて。」
直に合気道を習わせたのは、私でも夫でもない。ある事をたまたま目撃した、小谷流合気道の小谷佐恵子師範だった。
ある事とは、車に跳ねられそうになった幼い姉妹を両脇に抱いて引きずりながら、歩道に救い出したのだ。小谷師範は、直を１００人に１人の逸材と見た。それは筋力ではなく、合気道の極意を産まれながらに持っているのだと…。直は小柄な小学４年生であり、２人の子供を素早く動かせる筋力はない。そして、その能力は小さな虫であろうと、命を救う時に発揮される。技術的には小学生レベルであり、力を発揮していない時の直は、私でも充分ねじ伏せられる。しかし。前のアパートの公園で、カマキリを踏みそうになった時…見事に○○Ｋｇの私の体が宙を舞った。
おそらく。世界最強の技で、作戦を成功に導いてくれると私は信じていた。

作戦自体は難しくない。
夫は大学教授であり、学内に出入り自由だ。子犬が居る遺伝子工学棟には、研究室訪問と云う形で入ってゆける。実際一度そういう形で入った事があると夫は言った。私と直を伴って行けば、中国人の２人は舐めてかかってくれるだろう。数秒で気絶してもらって、犬を連れ出し、２部に電話して交渉。ハッピーエンドで終わる。
完璧。
だと良かったんですけど…。やっぱり現実は厳しいものでした。

次話！

ー第４話突入
につづく！

ー第４話突入

ー第４話突入

夫は岐阜環状線を繰舟橋（くりふねばし）に向かって右折した。橋を渡ってすぐに、職人の店と云うのがある。そこで、中国スパイを縛り上げるロープやら、作業着やらスコップやらを買った。レスキューはやっぱりオレンジだと云うので、全員がオレンジのニッカポッカと作業着に着替えて、気分を盛り上げた。ようするに、３人共びびっていたのでした。

職人の店を出て、コンビニと農協支店のある交差点を右折する。まっすぐ行くと、警備員が居る大学のゲートに突き当たった。

夫はＩＤカードを警備員に差し出した。

「長沼教授。その格好は何です？。ビルでも建てる実験ですか？。」

変だと思うのは、至極もっともな事に３人とも気付いたが…どうしようもない。

「いや…今日は休みで、穴掘り大会のイベントに家族で…財布を研究室に忘れてきたんでね。」

「あ～なるほど…こちらは奥様と娘さん。どうもはじめまして。」

警備員は不審な顔から笑顔になった。

私と直は笑顔で会釈した。

「…よろしいですな！。家族でイベントとは。うらやましい！。」

「いえ。娘がどうしても出たいと言うものですから…。」

そう言う私を直が睨んだが、無視した。始まってしまった芝居にはノルしかない。

「そうですか。頑張って穴掘って下さい！。」
仕方なく、直は買ったばかりのスコップを持って、愛想笑いをした。
車がゲートを抜けると、直は即座にクレームを付けた。
「どうやったら。私が穴掘り大会に出たくなるわけ？。」
「お父さんとお母さんが、穴掘りたいなんておかしいでしょ？。」
「私だって、おかしいよ。おしとやかな女の子なんだから！。」
夫が左手を挙げた。
「ストップ。すぐに戦場に着くぞ。その場しのぎのお芝居に、整合性を求めるのは無意味だ。直。」
「私の人格をゆがめるような展開には、否定する権利があります。教授。」
「その権利は、作戦終了まで行使するのは停止する。…着いたぞ！。」
全員が遺伝子工学棟と書かれた入り口の前で、ツバを飲み込んだ。

夫を先頭に直を真ん中に挟んで、ドアを開けた。スコップは入り口に置いておく。
５ｍ程の廊下があり、その一番奥に遺伝子工学研究室のドアが見えた。夫がノックする。
「物理の長沼です。陳教授いらっしゃいますか？。」
何か床に落ちる音が聞こえてきた…中の２人は、かなりイッパイイッパイらしい。
すぐにドアは開かなかった。時間は１５時４０分…中では作業が最大の山場を迎えているはずだった。
「陳教授？。警察の方がお話しを伺いたいと…。」
夫は挑発に出た。そしてそれは、見事に引火した。
陳教授と孫助手は、かなり頑張って読み取りを終わらせていた。孫

助手が読み取ったディスクを持ち、陳教授が犬のゲージを持って、突破を試みようとした。
ドアが思いっきり内側に開かれて、孫助手が体を低くして飛び出してきた。私と夫は右に身をかわした。直は孫助手の背中を飛び越え、陳教授の鳩尾（みぞおち）に当て身を見舞った。大きく後ろにのけぞりながらも、体勢を保ちながら後退する。直は四つん這いで逃げようとする孫助手に向き直って走り、もう一度飛び越えて進路を塞いだ。その背中に、ヒジで当て身を入れる。孫助手は呼吸ができなくなって、床に這いつくばる。
その間に、陳教授は廊下に出てゲージを床に置き、３８口径の拳銃を直に向かって構えた。そのゲージを夫がさらって、研究室の中に飛び込む。あわてた陳教授の銃口が直から外れて、一気に間合いを詰めた直の当て身が、振り返った陳教授の眉間に炸裂し、陳教授は視界を失った。
私が孫助手と陳教授の手を背中に回し、夫が縛った。直がゲージを持って車に向かう。この上なく快調だ！。私と夫が遺伝子工学棟の入り口を出ると、直がゲージを下に置き、右半身（みぎはんみ）で仁王立ちしていた。
快調なのはここまでだった。

「出るもんが出たか…。」
夫が口にした先には、２m近いマッチョな中国人が、直に対して右（み）相半身（ぎあいはんみ）の構えで立っていた。
「直っ！。」
夫がスコップを直に投げた。振り向かずに直はスコップをつかんだ。完全に命を守るモードに入ったようだ。
「子犬は渡さないんだから！。」
マッチョな中国人はＴシャツにゆったりとしたズボンを履いていた。

靴は明らかにジャングルブーツだ。彼は普通の日本語をしゃべった。
「一般市民が、こうした事に首を突っ込まない方がいい。去りなさい。」
筋肉馬鹿では無さそうだ。紳士的だ。
「去るのはあなたです！。」
直は一歩も引かない。私はゲージを直の横から後ろに下げた。ものすごく重い…見ると2つのゲージに5匹づつが身動き出来ないで入れられていた。眠らされているようだ。
私も夫もスコップを構えて、ゲージをガードする。
「これは同志の為です。お許し下さい。」
マッチョな中国人は、構えを解いて合掌して見せた。
今まさに、マッチョな中国人が間合いを一気に飛ぼうとした時…その気合いをくじくタイミングで声が飛んだ。

「洪少平退きなさい！。」
声のする方を全員が見た。3輪自転車に乗った老婦人がこちらに向かってくる。直とマッチョな中国人が同時に叫んだ。
「小谷師範！！。」
小谷佐恵子師範は、直とマッチョな中国人の間に自転車を止めると言った。
「洪！。直と戦ってはなりません。」
洪は困惑した顔で言い返した。
「師範…。これは故国の人々の命が掛かっています。どうか…見逃して頂きたい。」
「アメリカの人殺しの機械の設計図が、どう命に関わるのです？。洪？。」
洪少平は言い澱んだ（よどんだ）。
「…言えません。ただ退けませんと言う他ありません。」

「ならば。私が相手をしましょう。どれほど精進しているか、見てあげます。来なさい。」
小谷師範は構える事なく立ったが、完全に洪少平を圧していた。
「来なければ。行きます。」
この老婦人は、いつも道場に座って見ているだけで、もちろん指導もするが、手合わせを見た事がない。この老婦人が、２ｍの距離を一気に詰めて、突きを繰り出した。明らかに手も足も出ない洪は、防戦一方で、短刀取りで手を取り肘（ひじ）を決めようとするが…魔法のようにかわされてゆく。７発目の突きが体に吸い込まれた時、膝（ひざ）をついて崩れた。
「この場は、師範に免じて退きます…。」
洪少平は、後ろに飛んで走り去った。

小谷師範は追う事なく、私達の方に振り返った。
「長沼のお母さん。横山さんから電話を頂いて、駆けつけましたが…。不用意ですよ。」
「はい。…すいません。ありがとうございます。助けて頂いて。」
小谷師範の目がピクリと動いた。
「それは違います。私は洪少平を助けに来たのです。」
「はぁ？。」
「もし。洪が直と戦ったら、洪が死んでいる所でした。」
「……。」
「洪は６才から１７才まで、私の道場に来ていた一番弟子です。レベルは最高レベルです。最高レベルで洪が戦ったら…自らの力をコントロールできない直は、合気道における神の域の力を使ってしまうでしょう。そうなれば、洪は即死です。長沼さんのご両親。娘さんを殺人者にする所だったのですよ？。」
「……。」
「事は収まりました。それは良いでしょう。その犬達は横山さんに

お渡しなさい。一刻も早く。洪はまた闘いを挑んできますよ。」
夫が唖然(あぜん)として開いたままの口を動かして言った。
「小谷師範。しかし、私も妻も娘もこの子犬の命を見捨てる事ができません。横山さんに、このまま渡せば殺されるのはわかっています。殺されない保証を得るまでは…私達は逃げ続けるつもりです。」
「子犬の為に、洪を殺す事はなりません。」
「……師範。ではご一緒に来て頂けますか?。自転車は、私の研究室の中に。」
小谷師範はしばらく夫を見つめた。
「…良いでしょう。私と直がいれば、何人(なんびと)たりとも寄せつけません。」
こうして。長沼レスキュー隊に小谷佐恵子師範が加わった。

次話!。
ー第5話　説得
につづく!

ー第5話説得

ー第5話　説得

ゲージの中には、5匹づつ子犬が身動きできずに入っていた。出してあげたいが、逃げてる最中だ。頑張ってもらうしかない。つまり10匹と夫と私と娘に、小谷佐恵子師範…車のなかは満杯になった。車が走り出すと、私は横山さんの携帯をコールした。

「…横山さんの携帯ですか？。…長沼です。」

ー長沼さん。黙って聞いて下さい。中国特務の車をミスで、長沼さんの車の後ろに入れてしまいました。岐阜環状線をアクセルベタ踏みで、南に逃げて下さい。頭を低くして。撃たれますから。信号はすべて青になります。柳津（やないづ）のカラフルタウンに逃げて下さい。そのショッピングモールの駐車場にトラップを仕掛けましたから、そこに突っ込んで下さい。それでなんとかなるはずです。ー

「あの？事情は全部…。」

ーわかってます。申し訳ありませんが、すべてモニターさせて頂いてます。ご主人に、カラフルタウンにアクセルベタ踏みと伝えて下さい。ー

「…はい。おとうさん。柳津のカラフルタウンにアクセルベタ踏みでって横山さんが…。」

「了解した。信号は青だ。」

「全部青になるんだって。」

「…やるな2部は。しっかりつかまってろよ。」

タイヤを鳴らしながら、車は右折して岐阜環状線に入った。

私は後ろを見た。

オープンカーのロードスターに、シルベスタ　スタローンが持ってたような機関銃を持って、中国人が立ち上がった。
「みんな伏せて！。来るよ！。」
パッパッパッパッ　パッパッパッ。
花火のような音がして、リアガラスが割れた。さらに、それが弾かれた。
「なんであんなもの持ってるの！。日本でしょ？ここは…。」
夫は寝そべるようにして運転している。
「…少なくとも映画館じゃない。」
その声を遮るように、ルームミラーの根元が砕かれ、後ろにルームミラーが飛んでいった。
それを小谷師範が左手でキャッチした。
「このような暴力は、断じて許しません。」
小谷師範は、上半身だけをひねって後ろを睨むと、左手のルームミラーをブーメランのように投げた。恐るべし小谷師範の気合いで、それがフロントグリルを突き破り、エンジンルームに消えた。
「ちょっと効果ないかも…。」
「よく見ていなさい。」
現実にはラジエターまでも突き破り、冷却水を流出させた。エンジンが高温になり、流れ出た冷却水が蒸気の白煙となった。中国人の視界が無くなった。

私の携帯がポニョポニョ歌いだした。
「…はい長沼です。」
ー横山です。お見事です。もう一台フェラーリがいますから、引き続き頑張って下さい。ー
「はぁ。もう車バラバラですよ？。」
ーもうちょっとで、カラフルタウンです！。長沼さんファイトです！。ー
「わかりました。おとうさん、フェラーリがもう一台くるって！。」

「勘弁してくれよ！。カラフルタウンに突っ込むぞ！。」
リアをドリフトさせながら、ショッピングモールカラフルタウンに入った。

ここは、かなり広い駐車場を持ちながら、出入り口は北側の一箇所しかない。私達の車が入り、中国人のフェラーリが入ると、一箇所しかない出入り口はパトカーで塞がれた。
駐車場は中庭のようになっていて、８割方一般の買い物客で埋まっていた。その中で、車は急にスローダウンして…ついに止まった。
「クソッ…車は終わった。よく聞け！。降りてショッピングカートを全員押して、エレベーターで屋上の駐車場に行くぞ！。質問は無しだ。ゴー！。」
何の事やら分からないまま、入り口に向かった。

そこは食品売り場になっていて、ショッピングカートが置いてある。
「その機関車トーマスのヤツを…。」
カゴの下に子供を乗せられるようになっていて、カートの車高も低くてトーマスの部分も結構頑丈だった。夫と私のカートにそれぞれゲージを載せて、小谷師範も直も空のトーマスを押して走り出す。
「こっちだ！。」
エレベーターに向かう。２基あるエレベーターが運良く両方共開いた。振り返ると窓の向こうで、中国人のフェラーリがパトカーに前後からぶつけられてサンドイッチになっていた。
「ユウ！。乗るぞ！。」
言われて、２人づつに分かれエレベーターに乗った。
夫は小谷師範と。私は直と。その直が質問してくる。
「このトーマスを持ってく理由は？。」
「ゲージを運ぶ為でしょ？。」
「私はいらないんじゃない？。」

「予備が要るのよ。多分…。」
「あ～なる程ね。」
ショッピングモールは二階建てで、すぐに屋上に着いた。
ドアが開いて出た所に、横山さんがスーツケースを持って待っていた。

「お疲れ様です！。ケガは有りませんか？。」
「なんとか…車は潰れましたけど。」
結婚前からの思い出の詰まった車だった。場所があれば展示して残しておきたいくらいだ。ちょっと涙が出た。
「２部で新車を用意できるかもしれません。部長に掛け合います。」
横山さんは気を使ってくれた。夫の言葉が、現実に私を引き戻した。
「この子犬についてですが。子犬の命が保証されなければ、お渡しするつもりは…私達には有りません。」
初めて、横山さんが即答しなかった。
直と小谷師範が半身になって構えた。それを横山さんはチラッと見て、首を左右に振った。
「２部としては…この子犬のＤＮＡに刻まれている情報は、アメリカ合衆国の所有物です。遅滞する事なく返還しなければなりません。アメリカ合衆国が、この子犬をどうするかを我々が強制する事はできません。恐らく、処分されるでしょう…。ならば、これを取って下さい。」
横山さんは持っていたスーツケースを平行にして開いた。
刑事モノや、石原軍団がよく持っている物が４丁…スポンジの中に埋まっていた。
「これを早く取って！。私に突きつけて下さい。急いで！。」
せかされて、全員が拳銃を取って横山さんに向けた。
「安全装置が掛かってますから、引き金に指を入れても大丈夫です。」

…って事は本物？。
「横山さん…これ実弾ですか？。」
「そうです。ヘリが来てパイロットが確認するまで、そのままで居て下さい。」
どう見ても、おばあさんと親子が、強盗をやってるギャグ映画にしか見えない。警察ヘリが近くまで舞い降りて来た。強いローターの風を受けながら、横山さんがハンズフリーのマイクに向かって叫ぶ。
「離れて！。とりあえず！ここは逃がすしかない！。」
警察ヘリは離れていった。横山さんは、マイクのプラグを両手で引き抜いて言った。
「南側に、出口専用のスロープが有ります。ハジメさんは、そこから逃げるつもりなんでしょ？…。」
夫はうなずいた。
「…下に竹山さんを呼んでおきましたから、行って下さい。ここはすぐに、警官で一杯になります。」
夫はもう一度うなずいて、カートをゴロゴロ言わせて南側に走り出した。
「こっちだ！。」
夫が先導する。
角を曲がると、一車線の急なスロープが現れた。夫の背中をつかんで引き留めた。このジェットコースターのような出口は、用水路に架かる橋になっていて、その先に…草が生え放題の空き地が見える。制服の警官２名が、私達に背を向けて立っている。
「このトーマスは、ここを降りるためなの？。」
私は指差して言った。
「理論的に破綻はないと思うが？。」
「…教授？。ブレーキは？。どうやって止まるの！。」
「草むらが見えるだろ？。真っすぐに突っ込めば…５ｍ程度で速度は０ｍになる。空き地は１０ｍ程度だ。実測はしてないが…誤差は１ｍの範囲内に収まると計算した。」

「転ばすに、真っすぐに突っ込める確率は？。」
「行き先を真っすぐ見れば１００パーセントだ。少しでも横を見たら０パーセントだな。」
冗談じゃない…と言おうとした私のカートを、小谷師範がさらった。
「長沼さん。見てなさい。こうやるのです！。」
小谷師範はーどきなさい！ーと叫んで警官を蹴散らし、真っすぐに橋を渡り、草むらに突っ込んだ。
直も続く。夫も間を置かずに行った。
「こんなの有り？。」
私もスロープにトーマスを押し込んだ。ありとあらゆるジェットコースターが怖くもなんとも無い事を知った。このトーマスには、レールも安全装置もない！。死んだら保障もない！。
直の横に夫が突っ込み、小谷師範が信じられない動きで、私の進路からカートをどけた。そこに私は突っ込んだ。
死ぬかと思った。

「大丈夫か？。」
夫がキアヌ　リーブスに見えた。かなり太目だが、私には問題ない。返事をする前に、一度もしてもらった事のない、お姫様抱っこで持ち上げられた！。ありえない！。
…のは、私が幸せだった事だ。この熟年夫婦の間に、これはありえない。そのまま、横付けされたトヨタハイエースに運ばれた。
すでにゲージは積まれ、ドアが閉まると同時に車は唸りを上げた。
「お前ら。いつからそんなにラブラブになったんだ？。」
透くんが、ルームミラーを覗きながら言うのが見えた。
「幼稚園の入園式の後からよ。」
「ユウ。それはありえない。」
ー私もさっきまではね。
…と心の中でつぶやいた。

次話！
ー第６話ベリー　ペット　グット　レストラン２１号店
につづく！

ー第６話ベリー　ペット　グッドレストラン２１号店

ー第６話ベリー　ペット　グット　レストラン２１号店

「とにかく、子犬達をゲージから出してあげましょう。」
小谷師範が言った。一匹でも子犬にしては重かった。
「なんで鳴かないの？。」
直が聞く。
「体は暖かいから、睡眠薬か何かかもしれない…。」
「死んでないよね。おかあさん。」
「死んでないよ。直。大丈夫。」
車は、岐阜から名古屋に向かう国道２１号線に入っていた。透くんが、またルームミラーを見ながら言った。
「知り合いのペット同伴レストランが、この先にある。ベリー　ペット　グット　レストラン２１号店って云うんだけど…そこは獣医も居て、治療もやってるんだ。」
夫が怪訝な顔をした。
「透。なんか店のネーミングが悪すぎる気がする。まるで…。」
「…ゴーケアフォーナカジマ店みたいか？。」
「あ～。まさにそのセンス。」
「経営者が同じなんだ。でも中身のレベルは高い。獣医も腕が良くて、東京や大阪から高速でやってくる人もいるくらいだ。」
なんだか詳しいので私が聞いた。
「透くん所は、ペットいないよね？。」
「あぁ…。この前のメモリアルの事件で、知り合いの記者に頼まれ

てね…社長とのインタビューを設定したんだ。ホラ・ゴーケアフォーナカジマ岐阜店で、分部がネットを使おうとしただろ？」
夫が言った。
「確か…本で読んだ。ニューグリップタイヤ社員失踪事件で被害にあった1人だ。（クライムズクライシス参照）なら…こっちの事情を話しても大丈夫だろうな。」

オープンカフェのデッキの奥に、ヨーロッパ風の店舗があり、筆記体の英文で店名が書かれている。駐車場はいっぱいだった。
「ハジメ。俺は社長に事情を話してくるから運転席に居てくれ。みんなは一緒に…。」
４匹は透くんと直が抱いて、残りはゲージに戻してレストランに入っていった。

中には２０人程度の人達と一緒に、様々な種類の犬が食事したり、会話したりしていた。私は犬を飼った事がないので、チワワにダックスフンド、ブルドックくらいしか判らない。そう言えば…この子犬達は？何て云う名前の犬なんだろう？。透くんはウエイトレスに社長を呼んでもらった。動物病院の方から、ノソリと社長が現れた。
「どうも竹山さん。…オヤ？どうしました？。」
社長はいきなり、グッタリしている子犬に近づいて、見た。
「すぐ診察室に！。話はそこで、先生と一緒に！。」
中は国立病院かと思う程の設備だった。獣医の先生も何も聞かずに、子犬を抱き上げて診察を始めた。透くんが事情を話そうとした。
「先生…。」
「黙って！。これは…睡眠薬を大量に投与されてる。しかも長時間狭い所に押し込まれてたな。」
「その通りです…。」
「黙って！。」

私達は完全に黙らされて、延々と治療が続いた。

夫も来て黙らされた。１時間程して、先生が夫に顔を向けた。
「解毒しました。もう心配ありません。屋上に屋内ドッグランがあるので、そこに移して様子を見ましょう。」
「はい…。」
「この子犬は、ウェルシュ　コーギー　ペンブローク種ですが…噂に聞いたナノマーク犬ですね…。」
「ナノマーク犬？。」
「中国が独自に開発した技術で、親犬の遺伝子に入れたい情報を入れる。すると、子犬のＤＮＡの表面にナノサイズの凸凹が規則に従ってできる。その子犬の全てのＤＮＡに。一匹の子犬に単行本１００ページ分の情報が入れられとの事です。」
私は聞いた。
「そんな事して、犬に異常は起こらないんですか？。」
「成犬に達するのが６０パーセント。成犬になっても、全体に寿命は短いと言われています。」
「ひどい。１０匹に４匹は死んじゃうんですか？。」
「中国の研究者は１００パーセントにすると言ってますが、方法は見つかってないようです。」
「どうして、そんな事をするんです！。」
「個人所有の犬のＤＮＡを採取するのは、よほどの理由がなければ困難です。さらに、ナノマーク犬のＤＮＡの表面を読み取る装置は、北京大学に、共同研究を行っている日本の岐阜大学。中国人民解放軍技術研究所しか持っていません。つまり、犬に情報が入っているかどうかを、空港や港で確認できない。証拠を挙げる事が出来ないんです。」
「ナノマーク犬だけで、止められないんですか？。」
「私がナノマーク犬だと判ったのは、この犬の顔を判別できるから

です。」
「顔…ですか？。」
「動物愛護団体が、ナノマーク犬として入手した写真を見せてもらった事があります。これは、あの写真の犬です。」
「全部同じに見えますけど…。」
「ほとんどの人がそうです。空港や港に犬の顔を見分けられる人はいません。おそらく、これからは多くの犬が情報戦の犠牲になる。実験の段階の犠牲もあったはずです。」
「この１０匹を救っても…ですか？。」
「救える１０匹は救わなければなりません。これは、明らかに虐待です。世論に訴えてナノマーク犬を造る事を止めさせなければなりません。今に、人間に転用されかねません。そんな未来を残してはいけません。未来は素晴らしいものでなくてはならない。……そうでしょう？。」
夫も私も直も、透くんも小谷師範もうなずいた。

コーギー達を屋内ドッグランに移そうとした時に、レストランの方から叫び声と、犬の吠える声があがった。
「来たようね…。直。行きますよ。」
小谷師範と直はレストランに向かった。
「犬を上に…。」
夫と私に透くん、獣医さんに社長で、診察室からの階段を上がり、下に通じるドアを閉じてカギを掛けた。

ベリー　ペット　グットレストラン２１号店の経営者、中島勝義は竹山透と共に、外に現れた２０人程の集団を見た。これに、老婦人と小学生が、入口を出た所で、体を半身にして構えている。
「社長。あの２人は合気道の師範と天才少女です。心配ないですか

ら。」
「いや…そんな事言われても安心できるわけないでしょう！。竹山さん、警察を呼ばないと！。」
竹山は携帯を出そうとする中島社長の手を押さえた。
「駄目です！。コーギー達が、それではアメリカの手に渡ってしまいます！。信じて…あの２人を！。」
洪少平を中心に、２０人が小谷師範と直を包囲するつもりで、間合いを詰め始めた。

次話！
ー第７話　理由
につづく！

ー第7話理由

ー第7話　理由

屋内ドッグランは天井までネットで囲まれている。そこから洪少平や小谷師範、直が照明に照らされて見えた。声も聞こえてくる。
「小谷師範。本国を説得して、子犬が持っている情報について、話す事が出来るようになりました。」
小谷師範は構えを解かない。
「洪。聴きましょう。」
「子犬に入っている情報は、戦闘機のデータだけでは有りません。それも本物ですが…もう一段ナノサイズの小さい情報が入っているのです。」
「それが、子犬を渡す理由となるのですか？。」
「はい。この作戦は戦闘機データを奪取するのが目的でした。しかし、アクシデントで、ＢＣ兵器の情報まで偶然…現地の組織が入手したのです。」
「ＢＣ兵器？」
「生物化学兵器…ウイルスや毒ガスです。アメリカの軍事研究者は、ウイルスの遺伝子を操作して、特定の人間だけを殺害するウイルスを開発しています。そして、アメリカに好意的でない、我が国の軍人及び軍需産業に携わる人間の、家族のみを殺傷する、ウイルスのデータが戦闘機のデータに紛れて発見されたのです。」
「それは確かなのですか？。」
「残念ながら…現地組織が有ったビルは、ニトログリセリンを積ん

だタンクローリーが突っ込み、全員が行方不明になりました。」
「なんと云う事を…。」
「１０匹のうち１匹に、そのデータが入っているはずです。それは人民解放軍の研究所でないと、小さ過ぎて読み取れないのです。私はそのデータを本国に持ち帰らねばなりません。そのデータをアメリカ政府に示す事によって、このウイルス攻撃を阻止できるものと、本国は意図しています。」
「何故…その様なものを？。」
「解りません。私は政治家でも将軍でもありません。ただ、このウイルス攻撃が行われる事は予測できます。過去に、経済解放に反対していた党の幹部や軍関係者の家族が、ウイルス感染して１時間で全員死亡した事が有りました。これは中国国内でも発表されませんでした。」
「それが。理由ですか…。」
「大ざっぱでは有りますが、小谷師範には判ってもらえると信じます。」
この話を聞いていた全員が、暗澹（あんたん）たる気持ちになった。何故これほどまでに、国家と云う物は酷い未来世界を目指そうとするのだろう。こんな事で築かれた社会の中で、誰が幸せや希望を見いだせるのだろう。
「やめさせなきゃ…。」
下のレストランから透くんが歩み出て言うのが見えた。
「国家のする事を、個人が止める事は出来ません。」
洪少平が残念そうに言った。
直の声が聞こえてきた。
「かわいそうだけど…。コーギーをあげましょ。中国の人達が殺されちゃうよ。」
泣いていた。小谷師範が抱き寄せるのが見える。

「いえ。渡しません。」
小谷師範に全員が何で？と驚いた。
「中国政府が、今後ナノマーク犬を造らない事と、このウイルスがどの国も使用出来ない条約の作成を先導する事を約束するまでは…一匹たりとも渡しません。」
洪少平は、あきらめた顔になった。
「師範。お気持ちはわかります。ですが、現実的では有りません。そうする事で生じる犠牲も考えて下さい。」
「国家は。明るい未来を造る努力を放棄しています。子犬の命をもてあそび、家族をウイルスで殺そうとする。そんなやり方が、どこにも通じていない事を、私達は国家に言わなければなりません。違う。ノーだと。たとえ撃ち殺されてもね。」
「理想はわかります。私だってそうしたい。私と師範がノーと言って殺されたら、世界は変わると思われますか？。死体を積み上げてきた国家が変わりますか？。」
「見なさい。日本国民は３０年以上も、戦争にノーと言い続けてますよ。日本を取り巻く状況は、戦争を必要としているにもかかわらずですよ。日本政府は国民がノーと言う為に、武力以外の方法で努力しているのです。国家を甘やかしてはいけないのです。」
洪少平はしばらく沈黙した。
「では師範。私はどうすべきなのですか？。退く事も闘う事もままならない。」
「私に命を預けなさい。中国政府との交渉を手伝うのです。」
意を決すると洪少平は、北京語で周囲に何か言った。２０人の洪の部下に動揺が走った。
洪は、部下の方に向き直り、下がって小谷師範の横に立った。
私は体が震えた。
２部と交渉する覚悟は有った。でも、中国政府と交渉する覚悟はない。死にたくない。でも、小谷師範と洪少平は…それをしようとしている。夫と私だけなら、あきらめてた。

私は…この師弟に、すいませんと言うしか無かった。

次話…。
ー第８話　交渉　負けるな私！
につづく！

ー第8話交渉　負けるな私！

ー第８話交渉　負けるな私！

ベリー　ペット　グットレストラン２１号店の前の、国道を走っている車の流れがピタッと止まった。何かが起こる前兆だ。
その国道に、パトカーがサイレンを鳴らさず集まってきた。そう私達は、中国　日本　アメリカを敵に回している。レストランのお客さんと犬達。そして社長さんと従業員さんを巻き添えにしている。
「おとうさん。ここから移動しないと…お店やお客さんに迷惑がかかるよ。」
「そうだな。何か考えよう。」
夫は手を伸ばして、私の手を握った。気づかなかったけど、みっともない位に手が震えていた。夫の手も。でも、手を握り合うと…震えが止まった。
パトカーからは誰も降りてこない。２部もこない。全員殺されると私は思った。
「死んじゃう私達?。」
「ユウ。これが終わったら何する?。」
夫は的はずれの事を言った。
「何をって?。」
「ユウ。何する?もう1人子供つくるか?。」
「…何言ってるの?。」
「考えて。明日はどれだけ素晴らしいか考えて。そんな素晴らしい未来が待ってるのに…死ぬわけにはいかないだろ?。」

ーそうだ。死ぬなんて　死ねるわけない

私は涙をぬぐって、髪を横に払った。

「コーギーを飼う！。一匹が限界だけど。」

「よし！。終わったらコーギーを飼おう！。」

「子供達とね！。」

「もちろんだ。子犬を連れて下に行こう。」

レストランのお客さんに手伝ってもらって、１０匹の子犬をレストランに下ろした。

ー頑張って。

ー負けないで。

ーやれるよ。

と声が掛かる。

私達に気づいた直が、振り返って走りより、私の足に抱きついてきた。

「こわいよ。こわいよ。」

「おかあさんの足に抱きついてて。そこなら大丈夫だよ。神様はきっと見ている。正しい努力をしている人間を見捨てたりしない。」

私はそう言うのが精一杯だった。

やがて遠くから、パタパタと音が近づいてきた。夜の闇の中から、迷彩色の双発ヘリコプターが現れて、国道の上に着陸した。やがて、１０人程の護衛に囲まれて、テレビでよく見る背広の人物が近づいて来た。

「富樫（とがし）総理大臣？。」

その横に、もう1人黒い背広の人物を伴っていた。その黒い背広に向かって、洪少平が敬礼した。そして、その人物を先導し始めた。

ヘリの音で会話は聞き取れない。一行は、私達の前に来た。

小谷師範が私に向かって言った。
「長沼さん。総理大臣と、こちらは唐嘩嶺(とうかりょう)中国国家主席です。洪が通訳します。」
まず総理が口を開いた。
「長沼さん。さっそくですが、中国全権代表が交渉をしたいと言われていますが。その用意はございますか？」
一般市民に対して、その言葉使いは丁寧だった。夫が私の背中を突っついた。
「はい！。有ります。」
小谷師範が小さな声でー頑張るのですーとささやいた。
レストランのお客さんも獣医さんも社長も従業員さんも見守ってくれている。
「では。そちらの要求をお願いします。」
「まず、この１０匹の子犬の命の保証をお願いします。」
洪が通訳した。唐国家主席はうなずいた。
「ナノマーク犬を造る事を中止して下さい。犬は私達と同じ命です。道具にしないで下さい。」
唐国家主席がうなずくのを待った。
「アメリカのウイルス兵器が使われないように、条約を作るよう世界に働きかけて下さい。」
洪は通訳した。唐国家主席はなかなかうなずかなかった。
しばらくして、北京語で口を開いた。洪が通訳した。
「それに関しては、本国に打診しなければ返事はできない。しかし。一刻も早くウイルスのデータを入手する必要があります。我々のつかんだ情報では、明日の朝7時にウイルス攻撃が始まるとしています。長沼さん。助けて下さい。子犬は決して殺したりしません。」
富樫総理が言った。
「条約は国内の批准(ひじゅん)が必要です。日本政府も中国政府と努力する事をお約束します。妥協して下さい。」
私は唐国家主席と富樫総理大臣をかわるがわる見た。

「ひとつお聞きしたいんですが？。」
「どうぞ。」
「私みたいな一般市民と、どうして交渉して頂けるんですか？。無視する事だって、できるはずです。」
洪少平の通訳を聞いていた唐国家主席と、富樫総理、洪少平、小谷師範が顔を見合わせて笑った。ー何？
総理が言った。
「この３人は、すべて小谷師範の弟子なのです。付け加えれば、長沼さんの娘さんもですがね！。」
少し気が遠くなった。私達が無事だったのは、単に小谷師範のおかげだったとは…。
「それに、このレストランは、妻がよくパピヨンのアキと来る店でね。店を壊したりしたら、妻に怒られますよ！。」
富樫総理は笑わせようとしてくれたが、笑えなかった。
洪少平が言った。
「長沼さん。犬をお預かりしたいのですが？。よろしいですか？。」
私はうなずいた。
洪少平の部下が１０人来て、一匹づつ抱いてヘリの中に入ってゆく。
見送りながら、涙が出た。
「子犬達。精一杯生きて！。」
と叫んだ。１０匹の内４匹は成犬になれないのだ。

ーエピローグ
１ヶ月後　長沼家

私達は何とか通常の生活に戻った。

夫はコーギーを飼おうと言ったけれど…私はあの１０匹を渡した事で、そんな気になれなかった。もし中国政府が約束を破っても、私にはどうする事もできない。やはり、断るべきだったのかも…と思ってしまう。
しかし、ウイルス攻撃についてはテレビニュースでも新聞でも大きく報じられ、最終的にアメリカ政府は、軍の独断による暴走であったとして謝罪した。
日本と中国は、こうしたウイルス兵器の使用禁止を求める声明と、禁止条約の締結を目指すと発表した。
ナノマーク犬については、ニュースに出てこない。しかし、ベリー　ペット　グットレストランの獣医の先生は、動物愛護団体の情報として、中国は縮小をし始めていると教えてくれた。期待していなかったけれど…小谷師範の手前、唐嘩嶺国家主席も努力せざるおえなかったようだ。もうひとつ、ブリーダーの鳥居さんの話がある。事件の翌日に岐阜保健所の職員さんから、メールが入っていた。

：Ｍｅｓｓａｇｅ

先日は、子犬を引き取って頂き有難うございました。本日、犬の譲渡会を行い、１６３匹の持ち込みに対して２００名の希望者におこし頂きました。これは、言わないで欲しいとの事でしたが、ブリーダーの鳥居さんもお見えになっていました。事情をお聞きした所、長沼さんの涙を見て、自分が間違っていると気付いたそうです。鳥居さんはジャンケンに負けて、犬を引き取れませんでしたが、もう処分に持ち込まれる事はないと思います。お怒りとの事と思いますが、どうか許してあげて下さい。頼まれた訳ではありませんが、こうしたブリーダーの方は稀です。私から長沼さんにお願いしたい。過ちを正す事はばかる事無かれと言う言葉もあります。怒りと共に許す事も大切です。余計な事であったかも知れません。そうであったなら、お許し下さい。

岐阜保健所職員　野犬担当官

ーＥＮＤ

あの時は、自分のしたことは無駄かもしれないと思ったけれど、やれば報われるものだなと…。

そんな事を台所で思っていると、一番下の桜が何やら持って歩いて来た。重そうだ。

「桜？。何それ。」

「コーギーちゃん！。」

見ると…見た事の有るようなコーギーだった。

ー夫だな。

「何？。おとうさんが買ってきたの？。」

「ウゥン。ヨコヤンのおじさんだよ！。」

「ヨコヤン？横山さんじゃない？。」

「そっヨコヤン！」

私は桜から、コーギーを抱き上げた。

ーこの顔…見覚えがある。まさか…

桜を連れて、玄関から外に出た。夫と、直と歩がいる。そして、９匹のコーギーが元気にまわりを歩いている。一匹が私のカカトをカプッと噛んだ。

横山さんが立ち上がった。

「長沼さん。これはあの１０匹のコーギーです。ナノマーク犬が成犬になれない理由が判明したそうです。対策は、睡眠薬だそうです。…」

私は知らない内に、１０匹の顔を全部覚えていた。

間違いない。

「…それに、ＤＮＡの凸凹を消す技術も発見されて、もうこの犬はナノマーク犬じゃありません。」
「おかあさん！。コーギー飼ってもいいでしょ？。」
直がイタズラっぽく言った。
「いいでしょ？。いいでしょ？。」
歩と桜も合唱する。
「１０匹は無理よ。」
「長沼さん。小谷師範と竹山さん、中島社長と獣医の先生にスタッフ、富樫総理、あわせて９人。よろしければ、飼いたいとの事ですが…どうします？。」
「横山さん！。お願いします。」
夫が振り返った。
「良かったな！。おかあさん！。」
「ウン。色々ある。色々あるけどさ。やんなっちゃう事もあるけどさ。見て…世界は未来は、ホラこんなに素晴らしいよ！。」
犬達とたわむれる、子供達が見える。
夫は近付いて、優しく抱きしめてくれた。

ー後書きにつづく

ー後書き

ー後書き

８話プラスエピローグで、短目でしたが読んで下さって有難うございました！。設定的には、長沼一家を守る為に、２部は総動員体制でＣＩＡを抑えていました。横山しか出て来ないのはその為です。その部分を入れなかったのは、メインの長沼一家の話が、おそらく８話程度の白根の死闘で脇の話になってしまうからです。それでは本来の目的から外れてしまうと考えました。

長沼ユウには特別な能力を持たせなかったので、クライムズのように展開させると体が保たないと言う事で、だいたい１日で終わるストーリーにしました。

直には特別な能力を持たせました。単に直を登場させたかったと云う、作者の個人的理由です。小谷師範だけでも良かったのですが、結果的には親娘の会話が入って、作者的には楽しませてもらいました。

子犬の選定をするために、ペットショップに行きましたが、パピヨンとチワワしか居なくて、仕方なくーわが家の愛犬カタログーなる雑誌で選定しました。かなり乱暴に扱われるので、タフである事が必要でした。また、厳つくないのも条件としました。それらの条件で、ウェルシュ　コーギー　ペンブロークを選びました。ただし、重いと云うのは判らなくて、読者さんの情報に助けて頂きました。冒頭の鳥居さんが処分しようとした子犬は、犬種を特定していません。読者さんが好きな犬種にして下さい。主人公に感情移入しやす

くなるように、考えました。
例のごとくですが、ナノマーク犬と云うのは、作者が本作品の為に考えたフィクションです。特定の人間だけが発病する殺人ウイルス兵器については、これもフィクションです。現実にこういったウイルスがあるかどうかについては、作者にも不明です。あっても不思議ではない感じはしますが…。

合気道についてですが、小谷師範が洪少平に対して突きや蹴りを入れるシーンがあります。しかし、実際の合気道の教則本には、突きや蹴りは有りません。腕を捌いて、手の関節をキメて、投げて固める…と云うのが合気道です。しかし、短刀取りと言った凄い基本技が有り、むしろ技のレベルが上がれば、一番現実に使える武道かもしれません。合気道の目的も闘争ではないと云う事です。本作の合気道は小谷流合気道と云う事で、正統とは離れたものとお考え下さい。

これは主人公が犬を救おうとする話です。しかし、救い切れないと云う部分で苦しむ姿を描きました。命と云う問題に対する時には、救い切れないと云う現実から逃れられません。それに対する作者なりの考えを作中で、登場人物を通して描いてみました。
読者さんそれぞれが、それぞれの考え方で、答えを見つける問題提起になれば幸いです。

現実に、処分されそうになっている犬を、救い続けているボランティアの方々がいらっしゃいます。この物語のように、簡単な状況では有りません。もし、そう言った現実が、どうなっているかを知りたいと思われた方は、ー犬の処分ーと言うキーワードでネット検索してみて下さい。特定のサイトを作者が紹介するより、多くを知る事が出来ると思います。作者は、正に恐怖しました。

１話に登場する鳥居さんは、特定のモデルを持たない事を、改めて表記しておきます。また、岐阜保健所は岐阜市保健所とは無関係です。その内部、職員の言動も作者によるフィクションであり、現実の保健所の見解ではない事を、ご了承下さい。

主題は、人間の都合と命の重さでした。
命の重さは変わらないと誰もが思っています。しかし、都合は命の重さを変えるのです。
歴史は私達に、こう言います。黙っていても、命が尊重された時代はない。命の重さが尊重されるのは、大切な人の命が道端に捨てられないように、人々が努力した時だけだと。

最後に、この主題と動機を与えて下さった、秋さんに感謝します。秋さんがメッセージを送って下さらなければ、この作品は存在しませんでした。

では。ここまで読んで下さった読者さん。有難うございました！。
また中止になるといけないので、次作の予告はしませんが、スポーツノンフィクション風、スポーツフィクション？を予定してます。
また、よろしければ武上　渓にお付き合い下さい！。

２００８年９月１３日

武上　渓

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0602f/

神様はきっと見ている

2010年10月20日12時53分発行